

比較地域学

米田 巖

今年の4月、東大教養学部人文地理学教室より、勇躍として広島大学総合科学部へ赴任してから、早くも一年近くの時が流れ去ろうとしている。これまでの自分のささやかな足跡をみると、「仰いでもって天文を観、俯してもって地理を察する」〈易经〉ということばを、折に触れ、頑味しては、天地の間、わずかにあるおのれの卑少な存在を深く恥入る毎日をおくってきたように思える。馬令を重ねること35年、関心は、天文から地文、地文から人事へと下り、いささか地理ばなれしつつあるおのれに大きな驚鐘を鳴らしてくれるのは内村鑑三である。いわく「地理離るれば人なし、人離るれば事なし、故に事を成さんと欲するものは地理を究むべし」〈地人論〉。これを導きの糸にして、只今、まことに気宇壮大な研究テーマに取り組んでいる。題して、①「EC経済圏の地域構造」、②「ヨーロッパにおける大陸文化と北欧文化の比較地域学的考察」。いまこれを少し詳らかにしてみたい。

①の課題は、学部、大学院を通じて一貫して取り組んできたテーマである。一コマコン、米、中、日の4大経済圏に比肩しうべき経済圏に発展しつつあるECの地域構造を、イギリスを中心に比較検討すること。②に関しては、ヨーロッパ諸地域にのこる村落形態、社会組織、土地利用等の特質を、比較地域学的に考察して、マルク・ブロックのいう「逆行的方法」を援用しながら歴史景観を複元すること。とくに②ライン・ドナウ流域の平野、イングランドの平野などで前世紀まで存続していた大規模な集村における社会生活の相違、③大西洋縁辺地帯のケルト的な文化景観、④ゲランソン、ヘルムフリート、エネキストラの地理学者によって研究が進められている「太陽分割制によるGewann村」の研究（17世紀のスウェーデンの集落形態について一発表要旨：ヨーロッパ景観発生コロキウム、ドイツ・ヴェルツブルグ）を比較検討し、これらの実態をより詳細

に現地調査する。その際、推論のための有力な照準枠は、いわゆる地帯層序論〈Zone and Strata Theory〉に依拠する。ここから、集落、社会組織土地利用の変化の諸系列をとりだし、特殊ヨーロッパ的な地域性を抽出すると同時に、地域相互間の交流、とりわけ農耕文化の地域的伝播がどのような形で展開してきたか、という問題に接近する。たとえば、太陽分割制のGewann村は完全な集村でもないし、耕区も小規模で、牧区の中に散在している。その成立も南ドイツのレス地帯の集村と同列に論ずることはできない。しかし、こうした村の相互扶助の慣行は福祉国家建設の精神に継承されているし、土地利用の発展系列においても、共通して牧地、畑地森林の間にスムーズな代替性が認められている。またGäu, Commune, Parish, treb (f)などの歴史的にみて、農民の基本的な生活空間をなす基礎地域が、中世紀においてムラに分裂したこと、それらの上位の地域系ともいべき封建諸領域も、最初はこれらの基礎地域を足がかりとして成長、拡大したこと、封建領域相互の抗争と交流の中からあの強靱なProvincial Cultureが凝結したことそしてこれらのLocal Cultureを有する諸地域を民族レベルで統合したものが近代国家であったこと——こうした地域系の発展構造を無視してはEC経済圏、大都市圏、都市と農村の関係などを充分できない。

各地域の文化をその根底から理解するためには、地域住民の生活のありようが、景観としてどのように結実したのか、その実在をとうとうしてみたかれらの精神的希求を地域に即して考察すること—地域(的個)性の把握—が重要であるように思われる。そのための接近法として、景観の発生史的アプローチを試みる必要がある。

同郷の卓抜した国際人、新渡戸稲造博士が、自ら「大平洋のかけ橋」たらんと欲し、はたしてそれに

打ち殉じた。G・テイラーのいう地平和(学)

《Geopacifics》を築いていくためには、地域学に基づいた地道な地域研究を通じて、彼我の間に文化の在り方の相違一すなわち、特定地域の風土と歴史から決して切り離すことのできない独自の地域文化、その固有性が、同時的にも通時的にも存在すること—を根底から認識することが極めて重要であるように思われる。

「研究の発展の過程には、多くの分析の仕事よりも、むしろたとえ外見上は時期尚早であっても、総合することが一層役立つ時期、いいかえると問題を

解くことを試みるよりも、むしろさし当っては、問題をうまく提起することがとくに重要な時期がある」と指摘するマルク・ブロックの驚鐘は一聴に価する。分化に分化をくりかえし、自らの専門領域を、より狭い領域へと追いやる今日の専門化、特殊化の潮流の中にあって、ブロックのいうところは、ずっしりと重い。今日の科学研究は、すでにこうした時期に到達していると思うのは筆者1人のみの思い込みであるまい。

1978, 11 一路傍の石—

(英米研究 講師)

### 学問ノススメ その3

## 読書と文明

鈴木修次

文明が進むと、いきおい生活様式も変わってくるのは、いうまでもないことであるが、本の読み方ひとつをとってみても、明治・大正のころとはずいぶん変わってきたものだと思う。わたくしの父親は、いうまでもなく明治の人であるが、新聞を読むのにしばしば、声を出して、独特のふしをつけて読んだものだ。それでも父親は、教師でもあったので、黙読することの方が多かったが、きげんがよかったり、興が乗ったりすると、独特のふしまわしの音声がした。祖父はもっとひどかった。声を出して読まなければ、内容が頭にはいらぬといひ、ものを読むときはいつも声を出し、まるで「どどいつ」を口ずさんでいるといったふぜいであった。

高等師範学校から大学にかけて教えを受けた国文学の山岸徳平先生は、「写すことが、いちばん読むことなんです」とおっしゃられながら、和紙に筆で、たくさん異本をそっくり写しとられ、和とじのりっぱな本にしたてて、保存されていた。山岸先生所蔵の自筆本の異本というのは、ちょっと数えきれないほどである。

書誌学の川瀬一馬先生も、実に気軽に、そして丹精をこめて、和とじの写本を次から次へと作られて保存されている。写真機が普及して、学者は墮落し

たというのが、先生の口ぐせである。ごいっしょに台湾の故宮博物館の善本調査に赴いたときは、時間の関係から先生も貴重本を写真にとられたが、先生は専門の写真師を同行された。ご自分で写真機をいじったことはないということであった。あれこれ指定して写真をとらせながら、そばで先生は、せっせとメモをとり続けておられた。

私の場合は、おもしろい内容だな、いい文だなと思ったときは、そっくりその部分をノートに写して書名とページ数とを書いておくことにしている。戦時中、書物がなかなか手にはいりにくかった時代、窮余の策としてやったことであるが、そうしたノートがけっこうたまって役立っている。当時は、人からお借りした本や、図書館で閲覧の本などを多くそうしたのが、いつか習慣になったものか、このごろでは、かんたんに入手でき、自分のものになっている本でも、しばしばノートしないと気がすまない。

私の知人には、新しい本を読むとき、かならず扉の裏白を利用してかんたんな索引をつくる人がいる。記事のうちの心にとまったものを索引にとっておくのである。別の友人は、あらかじめ一定のカードを準備しておいて、そこにかんたんにメモをし、そのカードに適宜見だしをつけて、カードボックスに入れておく。その友人は、日本政治思想史の学者である。

本の読み方ひとつをとってみても、時代の変遷がありそうである。声を出して読むという読み方は、図書館などでははためいわくなるからすすめられないが、目からの刺激だけでなく、耳をとおしての刺激もはいるから外国語の学習などの場合には、必要でもある。ことばや文調を記憶に残すという利点がたしかにある。

写本をすると、なんとかしてそれをしあげたいという欲もでるから、一冊の本を完全に読みこなせる。それに書きながら読むのは、目だけで読むよりもずっと深く読めるものである。気にいった部分をノートするというだけでも、その部分が細かく読めるし、スピードはのろいが、あきがくるのが遅い。そして、目だけで読んでいるときと違って、なにかほかのものが残ってゆく。少くも、強い印象だけは確実に残る。

手をかけて読んでおくと、もういちどふりかえる必要が生まれたとき、再検が容易である。老眼になっても、自分の字だとわかりやすいという利点もあ

る。読むということは、目だけでするものだというのは、固定観念であって、耳を使う読み方、口を使う読み方、手を使う読み方も別にはあり、それらを併用すると、総合的に見てたいへんに効率が良い。

このごろは、写真機どころか、コピーの全盛時代図書館でも必要部分をすぐコピーしてくれるし、講義の材料もコピーで渡される。ノートをとったり、メモしたりするより、その部分のコピーをとった方がたしかに早いし、正確でもある。しかしコピーはけっきょくのところで、当面使用する資料だけのものであって、じっくり読もうとする対象にはならない。写真機が普及して、学者が墮落したという論法にかりるならば、コピー文明は、もっとひどい結果を生み出すだろう。便利な文明は、その裏に、たいへんなひ弱さを秘めているものだ。諸君も、コピー利用の軽便な読み方をせずに、手まひまかけて、じっくり耽読する、重厚な読み方を習慣づけてほしいものだ。そのためには時に、文明に背をむけることも必要である。

(アジア研究 教授)

